

ある性同一性障害者の自己構築プロセスの分析

—同一トランスクリプトによる知見の羅生門的生成—

莊 島（湧井）幸 子

はじめに

近年、様々な学問領域において質的研究が隆盛を極めていますが、質的研究の基本特徴はナラティブターンといわれる認識論の変革を土台としている。客観主義の基盤になってきた素朴实在論への懐疑や観察者と観察対象の相互作用や社会的相互行為の重視、そして意味やナラティブ（物語）の重視といった特徴がある。しかし、上記のような共通の関心を共有したとしても、質的研究法自体は全く異なる認識論の立場に立つ者に用いられていることもあるから、質的方法論には複数あるといえる。そこで、本稿では同じ語りのトランスクリプトにタイプの異なる2つの質的方法を援用する試みを行う。それは、質的研究における認識論的反省（epistemological reflexivity）に基づいて行われる。認識論的反省とは、ある研究のなかで、1. 当該研究のリサーチクエスチョンは、研究で「発見」しうることをどのように定義づけ、限界づけたか、2. 研究のデザインや分析の方法は、どのようにしてデータや知見を「構成した」のか、3. どうすれば異なる方法でリサーチクエスチョンを追求することができたか、4. リサーチクエスチョンの追求に異なる方法を用いた場合、現象についての理解がどの程度違っていたのか？といった問いに答えることである（Willig, 2001）。また、認識論的反省（reflexivity）とは、研究者自身が研究プロセスの中で意味の構成に寄与しているという自覚を必要とし、研究者が研究対象の「外部」にとどまれないことを認めるプロセスでもある（Nightingale & Cromby, 1999, p228）。このような認識論的反省によって、研究の中で我々が設定した世界や知識に関する仮定を省みることができるし、その仮定が研究や知見にどのような影響を与えているか考えることができる。調査で得られたデータを複数の質的方法論を用い、羅生門的な知見の生成—羅生門的生成—に関わる本稿の試みは、質的研究の新たな地平を開くものとなるだろう。

1. 問題

本稿は、同一データに対して異なる2つの質的方法を用い、羅生門的に知見を生み出す試論である。ここで「羅生門的」という用語について説明する。「羅生門」とは、芥川龍之介の「藪の中」を原作として黒澤明が映画化した作品であるが、その中で一人の男の死を巡って三人の人間による証言の食い違いが発生する。ここから、一つの出来事を巡って相容れない知覚、物語が存在することを「羅生門」と言い表すようになった（佐藤, 2002）。羅生門的な研究には、ある出来事を巡って、複数の家族成員の語りを重ねあわせて家族模様を描き出していこうとする文化人類学的研究（e.g., Lewis, 1969）や心理学的研究（e.g., 湧井, 2006b）はあるものの、羅生門的アプローチを方法論に用いた研究は数少ない。特に、質的研究や語り研究といった、方法や分析

の視点、分析者によって知見が変化する可能性をもった研究の場合は、一つの方法で得られた一つの知見にすぎりつくのではなく、様々な視点から得られたそれぞれの知見を公開していくことが重要であろう。知見を羅生門的に生成する中で、知見に食い違いが見られたならば、それこそが生身の人間の複雑さが垣間見られた瞬間なのであり、研究として扱うべき重要な問題である。

次に、分析の対象となるデータについて説明する。データは、ある1名の性同一性障害者の当事者の語りである。筆者は、この当事者の語りデータを基に湧井（2006a）として論文化した。本稿では、再度同一の語りデータに立ち戻り、湧井（2006a）とは異なるリサーチクエスチョンを立ち上げ、異なる質的方法論を用いて再分析を行う。

1-1 湧井（2006a）論文の概要

性同一性障害（gender identity disorder, GID）は、山内ら（1996）によれば、「生物学的には完全に正常であり、しかも自分の肉体がどちらの性に所属しているかをはっきり認知していながら、その反面で、人格的には自分が別の性に属していると確信している」状態である。わが国では、これまでGIDの疾病性に関する医学的研究や、当事者の社会的処遇に関する法律分野の研究が主になされてきた。湧井（2006a）は、従来の医学・法学研究を補うべく心理学的見地から質的研究を行った。つまり、湧井（2006a）はGIDという疾病を前提にするのではなく、個人が「GID当事者」になっていくプロセスを問い、当事者個人の内的世界を解明することを目的とした。そこで、当事者1名に縦断的インタビューを行い、人生の意味づけを分析するために自己物語論（Gergen, 1994）に依拠した。KJ法（川喜田, 1967）による分析の結果、当事者がいくつもの自己物語を彷徨しながら、病名認知し、「当事者」となっていく生き様がみられた。

ここで、自己物語論という分析の視点を選択したことで、知見には反映されえず、零れ落ちていった部分も当然存在する。研究における図と地ともいえよう。何が図で、何が地となっていたのか振り返るときに、冒頭に述べた認識論的反省が必要となる。次項では、湧井（2006a）の認識論的反省を行い、再分析を行うための新たな視点や方法について検討する。

1-2 認識論的反省による再分析の手がかり

認識論的反省においては、1. リサーチクエスチョンで「発見」しうることの定義と限界、2. 研究のデザインや分析方法がいかにして知見を「構成」するか、3. 異なるリサーチクエスチョンを立ち上げる方法の追求、4. 異なるリサーチクエスチョンを用いたときの現象理解に関する別の理解可能性の4点を検討する（Willig, 2002）。1の問いについては、湧井（2006a）のリサーチクエスチョンによって「発見」しうる限界は、GID当事者1名の主観性・経験の意味づけおよび解釈である。2の問いについては、1-1で述べた方法によって、当事者の語りは意味のあるカテゴリに分けられ、カテゴリ同士の関係性やカテゴリ変遷プロセスが検討されたといえる。その結果、当事者の経験の意味づけは自己物語として「構成」され、吟味された。3、4の問いは、異なるリサーチクエスチョンを立ち上げる方法や別の理解可能性について言及しており、同一トランスクリプトから新たな知見を生成するための重要な問いといえる。以下で、この問いを掘り下げてみよう。

1、2の認識論的反省から浮上する問題は、GID当事者と常に対話をしている筆者の存在が描

かれず、研究や分析の外部へ放り出されている点である。桜井（2002）の用語を借りるならば、それは「物語世界」と「ストーリー領域」の問題であり、Bamberg（2004）が提唱するポジショニング（positioning, 位置づけ）とも関連する。語りには、桜井（2002）が物語世界とよぶ語りの内容に照準した位相と、ストーリー領域という語り手とインタビュアーの相互行為で構築される2つの位相が存在する。ライフストーリーでは、事実や出来事について時間的、空間的に位置づけられて構成されている物語世界を、語り手が「いま、ここ」というインタビューの場（ストーリー領域）でどのように価値判断しているのかという評価も大事な構成要素であり、ストーリー領域を無視して語りのおもしろさや魅力を引き出すことはできないという（桜井, 2003, p.13）。また、Bamberg（2004）は、インタビューの語りの分析に関して①語られた物語の登場人物の中における話し手の位置づけ、②聞き手との間での話し手の位置づけ、③文化やマスターナラティブ（master narrative）に対する話し手の位置づけというポジショニングの3つのレベルの検討が必要だという。話し手はこれら3つのレベルで能動的な存在であり、3レベルが相互作用し、自己の連続性がもたらされる。3つのレベルのうち、①のレベルが物語世界に、②のレベルがストーリー領域に対応している。湧井（2006a）では、当事者個人の経験の意味づけを模索するという研究目的上、物語世界・ポジショニング①のレベルのみに焦点が当てられており、ストーリー領域である当事者と筆者の相互作用や対話の場面は扱われていない。

ここに異なるリサーチクエスチョンが立ち上がる可能性、別の理解可能性がみえてくる。「われわれは実際に人々と関わる過程を経てアイデンティティを作り出しているのであって、その逆ではない」（cameron, 1985, p.46）以上、ストーリー領域における「いま、ここ」という時間生きる語り手を再び掬い取る必要があるのではないだろうか。なぜなら、語りとは、単なる個人資料（personal document）ではなく、語り手が自らの経験の意味や主体的意味を構築する意味生成のプロセスでもあるからだ（松木, 1999; Peacock and Holland, 1993）。

2. 目的

本稿の目的は、羅生門的知見の生成という観点のもとに、インタビュー場面という語り手と聞き手の相互対話的状況において、GID当事者が自己を構築するプロセスについて、物語世界だけではなく「いま、ここ」で生じているストーリー領域の対話も含めて検討することである。

3. 方法

3-1 調査手続き

湧井（2006a）の研究参加者であったGID当事者1名（以下、ハルと仮名でよぶ）は、X年に某大学病院よりGIDと診断を受けて1年が経過していた。ハルは、研究参加当時24歳であり、女性から男性へ性別を転換する性別適合手術に向けて治療継続中であった。ハルによれば、ハルは幼少時代から「自分は将来女にはならない」という確固とした信念を持っていたという。小学校、中学校と不登校ではあったが、活発であり、男の子と外で遊ぶことが多かったようだ。しかし、継続した自己不安定感や孤独に苛まれ、14歳のとき深夜徘徊、自殺未遂を繰り返すようになった。20歳のとき、それまで悩んでいた性別や身体への違和感がGIDに由来するものであることに気づき、自らをGIDであると認識しはじめた。治療を進めつつ、周囲にカミングアウトを始めた

ハルは、22歳から専門学校に通いはじめ、卒業後、専門職に就く。性格は、筆者の知る限り好奇心が強く、何事に対しても興味を持ち、積極的である。

3-2 分析手続き

分析手続きは、言語をプロダクティブでパフォーマティブ（行為遂行的）なものとする言説分析の手続きとほぼ一致している。言説分析では、人々の発言や表現された観点や説明を、それが生み出される言説文脈に依存するものとする（Potter & Wetherell, 1987）。言説心理学の分析の焦点は、発言の行為志向性（action orientation）にある。具体的には、人々が社会的な相互作用の中（たとえば、インタビュー場面）で対人的な目標を達成するために、どのように言説資源を用いるかに関心を持つ。ただし、本稿においては通常の言説分析で行うような言い誤り・休止・中断・音量の変化や強調・聴取可能な息継ぎの分析は行わず、笑いを含めた言語的コミュニケーションの分析に留めた。その理由としては、言語コミュニケーションだけでも豊かな情報が含まれており、まずは言語コミュニケーションの分析に焦点を当てる必要性があることが挙げられる。

分析では、それぞれのインタビューのトランスクリプト毎に以下の分析手続きを経た。まず、インタビュー場面でハルと筆者の語った全ての発言内容について、語られた内容だけでなく、その発言が「いま、ここ」で起きている筆者とのインタビュー場面でどのような意味をもちうるのか、またその発言によって何が達成されるのかという視点から検討した。また、言葉の使い方、スタイルや文法上の特徴、好んで用いられるメタファーや比喩的表現への着目することも分析上重要な作業であった。

4. 結果と考察

ハルは「いま、ここ」で生じているインタビュー場面（ストーリー領域）において、複雑かつダイナミックに自己構築を図っていることが明らかになった。ハルの自己の構築プロセスにおいては、距離化という行為が重要だと思われた。距離化行為は、（1）他のGID当事者との間で、（2）自己と身体との間で、（3）過去の自分との間で、（4）今、自分がGID当事者として生きているということの4点で行われていた。また、ハルだけではなく、筆者もストーリー領域および物語世界の両方で距離化を行っていた。以下で、代表的な事例を提示し、距離化行為について説明する。距離化行為は、本文中、①、②、③…で表されている下位項目から構成されていた。なお、事例中のカッコ（ ）は、筆者によって言葉が補われていることを示し、三角カッコ< >は、二人の発言が重なっていることを示す。（笑）は、笑っていることを示す。

（1）他のGID当事者との間で行われる距離化

ハルは物語世界において、自分はGID当事者ではあるが、他の多くのGID当事者とは考えや態度が異なっていることを強調して語り、多くのGID当事者との間に距離を置き、自分をGID当事者集団のなかでも少数グループに身を置こうとしていた。

事例 1

筆者：まず（GIDについて）「病気」とか言っちゃいけないし、…中略…絶対タブーだからって（あるGID当事者から）言われて。

ハル：っていうか自分、普通に「病気だと思ってます」っていういろんなところでべらべら喋ってる。わっはっは。わー、やばい。自分は病気だ病気だって発言してるからそのうち刺されるかもしれん。（笑）

事例1は、「GID当事者の一部が『GID=病気』ということに抵抗をもっている」という筆者の情報提供から話が始まる。それに対してハルは、自分が「病気」であるという主張をインタビューで繰り返している。そのような主張をする自分は、他の当事者から恨まれて「刺される」のではないかと皮肉を述べ、他のGID当事者を①突き放している。筆者に対し「タブーがいろいろあるんだ。大変だね」と言い、自分をGID当事者の外部に身を置き、②客観視する語りもあった（この場合、むしろ筆者の方が当事者集団に巻き込まれており、それがハルの同情を買っている）。次の事例2では、ハルは、男役や女役を演じたがる他のGID当事者に疑問を抱いている。

事例2

ハル：GIDの人って凝り固まってて、よく男役になりたがる、女役になりたがるっていうのが多いっていうのを聞いてたから、「そういうを感じることはありますか」って（第三者に）質問してみたんだけど、「特にない」っていう話に落ち着いて…中略…だから「男」だから何かをしたいっていうことはないのね。

ハルは、他の当事者と自分の考えの違いについて、③GID当事者ではないパートナーとの確認作業を行っている。第三者の認証を得た自分について語ることで、自分が大勢の当事者とは異なることを際立たせている。他にも、自分がGIDであることに気づく転機となったGID当事者の自伝を読んだときのことについて「（GIDの）解決方法まで教えてもらっちゃって、ラリホー」、カミングアウトについては「思い立ったら吉日の人ですから」、性別適合手術のための資金については「（GID当事者になっていくまでの写真集をつくり）本を出してぼろ儲け」といった、④GIDであることに関する一見すると軽妙な語りがよくみられた。このような語り方をすることで、他の当事者とは異なるGID当事者としての自己を構築していると思われた。それに対して、筆者の態度は曖昧である。多くの当事者と同じ意見を持たないハルをどう捉えていいのかわからないまま、ハルの意見に抗い続ける場面もある。筆者は、ハルとの間に「GID当事者-GID非当事者」の境界線を引こうとして失敗しているものの、GID当事者ではない筆者にしてみれば、境界線引きの失敗は同時に筆者にハルへの親近感や安堵感を湧き上がらせていた。

（2）自己と身体との間での距離化

事例3

ハル：ただ、自分の中の問題として、胸がでている状態（膨らんでいる）が、自分の中で常に違和感があると。24時間違和感で。これに納得したことがないから、それを何とかしてほしいと。で、ペニスがついていないところ、要は穴があいている感覚があって、その感覚がとにかくどうしても違和感で。納得がいかない。それを取り除きたいだけであって。だから、男になりたいっていうよりも

男性体になりたいだけであるから。

ハルは、自らをGIDと認識する以前は、漠然とした身体違和感に苛まされてきたと語っていた。しかし、GID認識後は身体の違和感について、明確にどの部分に違和感があるのか、身体全体から切り離した語りをするようになっていく。事例3は、身体の違和感について具体的に語っている場面である。性別移行によって心まで男性になってしまうのではなく、その違和感を物理的に取り除くことだけを強調するハルは、手術をしても変わらない自己を手術前から構築し始めている。それは、当事者が性別を変更することに対する我々の不安を和らげるものとなっている。

事例4では、身体の違和感が性欲の感じ方に影響を与えていることが分かる。

事例4

ハル：（筆者に問いかけながら）性欲って出た時に、発想としてどういう発想になるの？こないださ、医大生の集まりで話した時にね、「性欲ってあるんですか？」って聞かれたのね。「うん、ありますよ」という話になって。その時に言ったんだけど、あたしその性欲の発想がね、非常に面白くて。セックスしたいって思うじゃん。そしたらそのあとに、「（ペニスを）入れたい」って思うんだよ。わかる？入れたいって思った瞬間に、「あ、ない」って思うんだよ。…中略…夢。こないだ、すごく官能的な夢を見た。

筆者：官能的な。

ハル：それがさ、それがさっていったら変なんだけど、…中略…びっくりして起きたから。そうそうそう。あれはびっくりした。

事例4では、ハルは自分自身の性欲の感じ方について、①客観的に眺め、「非常に面白い」と分析している。また、事例4では、夢のような無意識的な局面でハルが男性として性的な行為を行おうとして驚いて目覚めたという語りがされるが、これはハルの身体感覚が本能的であって、意識的にはコントロールが不可能であることを示している。

事例5は、ハルが身体の違和感についてハルの友人、筆者の2人に向かって説明し、それによって身体の違和感がおぼろげにも共有されていく場面である。

事例5

ハル：だって、自分はこんなに明確にあるのに、なんでないの？みたいなさ。あんたらおかしいとか！もしかしたらさ、この中では少数だけどさ、大勢だったら勝つかも说不定！とかさ。

筆者：そこまで結構、確信的な違和感なのねえ？

ハル：だから、誰にも口にしたことないし、それこそさ、女の人に「あんた、生理ある？」って聞くような間抜けな質問してるみたいなの。…中略…そんな当たり前のことを何でいまさら。

ハルの友人：その違和感ってさ、コンタクトレンズをつけてるような感じ？

ハル：あと、コンタクトレンズをさ、つけてない状態があるじゃん。何もなくてすっきり。で、つけてるときも忘れてるときもあるけど、時々なんかごろごろしてくるときあるじゃん？そのごろごろ状態がずっとあるような感じでさ。

ハルの友人：それ迷惑ね。筆者：すごい迷惑！

ハル：そうだから、取りたいの。だからね、なんか取れる気がするのに、取れないからおかしいな、おか

しいなって。自分のものだったら、くっついてるからさ、別に取れるはずないんだけどさ。これは取れそう・・・いぼとかと同じだよ。なんか取れる気がするじゃん。でも、あれ引っ張っても取れないんだよ（笑）。

ハルは初め、身体を感じるについて「自分の感覚のほう正しいのではないか」と我々に疑いをかけている。それほどハルにとっては、身体違和感が当然のものであること、これまで他者に問いかけもしなかったということが語られる。ストーリー領域では、身体違和感について距離化し、繰り返し他者に訴え、「病気」である自己や最終的には手術を望んでいる自己を理解してもらうことに成功している。会話に出てきた「コンタクトレンズ装着時のゴロゴロ感」という比喻によって、我々3人の間にそれまで共有し得なかった違和感への歩み寄りがはじまる。ハルの苦痛に近づくことで、①意識的にはコントロール不可能な違和感を取り除きたい（手術を受けたい）というハルの気持ちが、当事者ではない我々の側にも理解可能になっている。ハルが手術を望むのは、あくまで身体違和感を取り除くことが目的であって、ハルの人格に影響を及ぼすことはないと言筆者に感じさせた場面であった。

（3）過去の自己との間での距離化

ハルの語りには、自己や他者に対し否定的な見方をしていた過去の自己についての語りがある。ハルは、事例7では他者に対して、事例8では自己に対して否定的な見方をしていた過去の自己について反省を込めて語っている。これらの事例は、GID当事者としての自己のあり方に①段階が存在することを示唆している。そして、現在の自己は過去の自己を乗り越えたところに位置しているということが主張される。上に挙げた事例以外にも、男扱い・女扱いという話題の際に、かつては自分もそこに所属することを望んでいた「男世界」について、②客観的に分析するハルの語りもある。それは、以前は、「男世界」に所属することができないことで落ち込んでいたハルが、現在は過去の自己から距離を置き、「ちょっと面白い」と男世界のことを評する語りである。「めんどくさい」といって「男世界」から外れていったハルは、男世界に拘りを持って「GIDであることは大きな負と思っていた」過去のハルより段階的に上位なのである。そして、GIDであったからこそ見ることでできた社会的な差別の問題を筆者に教えるなど、GIDであることが逆にポジティブに機能するようになる。①段階的に、かつ②客観的に自己を語ることで、過去の自己から距離を置き、他者を責めたり、自己に負があると考えネガティブな思考から解放されていることを筆者に示している。それは、同時に自助グループにいる当事者たち（（1）でも話題に上ったGID当事者で、ハル自身は自分と考えが異なると考えている人々）との線引きもなしにしている。

事例7

ハル：でもね、それはね、自分が「外の人」という言い方が適切かな？その人たちは「（権力を）持っている」と思ってたんだよね。

筆者：（何をもっていたの）？

ハル：えーっとね、自分はそういうふうにしててもどこかで「男になりたいといってるだけの女」という風にしか捉えられていないとか、そういうふうには、外・・・例えばあなただったり、そういう人

たちは（権力を）持っていると思っていたから…中略…最近は、外側って言うのかな、人対相手の人たちも、そういうふうにもっと自然に受け入れられるんじゃないかなっていうのを結構思っているから。それが思ったのが最近だから、自分が最近でことは、自助グループとかにいる人にとっては、絶対（自分は）受け入れてもらえない存在ってなってるような気はするのね。

事例 8

ハル：とりあえず、まぁ最終的には、自分のことしか考えてなかったなっていうふうにはよく思いましたよ。

事例 9 は、さまざまな苦悩を経験したハルが過去の多くをすでに忘れてしまったという話の文脈における会話である。過去の苦しい経験はハルにとっては格段自分の中に残しておくべき情報ではなく、むしろ「消して」いく必要がある記憶とされ、ここでも過去の自己と距離を置くことで、現在の新たな思考をもった自己を構築するプロセスがみられる。インタビュー場面において、ハルが過去の自己との間で距離化を図ることは、ストーリー領域の視点からみると、GID当事者としての人生の歩みはハルを当事者として凝り固まらせていくのではなく、人間としてハルを解放させ、成長させたということを筆者に感じさせている。つまり、筆者の目の前に在るのは当事者としてのハルだけではなく、当事者であるかどうかに限らず人として対等なハルであるということを書者に訴えているように思われたのである。しかし、ハルは、現在になってようやく、そのように考えられるようになったという。少し前までは、ハルにとっては筆者も権力をもった存在と認知されていたことをこのとき知り、筆者は驚く。とはいえ、研究を行うにあたってハルを「GID当事者としてのハル」とカテゴライズし、自己との間で距離化していたのは、むしろ筆者側のほうであったことにも気付かされている。

事例 9

ハル：まぁ、そんなわけで。なんかね。最近、それより過去に遡れなくなってきた。

筆者：どうした？！

ハル：そう、なんかいろいろさ！…中略…もうすっかり忘れてしまう。やっぱり人間の脳みそは容量が決まってるからさ。要らない情報は消していけないとやっていけない。

（４） 今、自分がGID当事者として生きているということに対する距離化

ハルは、GIDとしての自己を受容し、自らを「病気」と意味づけながらも、GIDであることばかりにエネルギーを注ぐ生き方を嫌い、そのような生き方とは一線を引いていた。

事例10

筆者：でもね、ハルの場合だったら、仕事もあるしね、友達もいるし、恋人もいるし。結構普通にいつてるっていったらあれ（失礼）なのかもしれないけど。

ハル：普通に、普通の24歳です！そこはね、なんかね、すごくね、それ（性別を移行すること）がね、重要な意味を持つようになってるんじゃないかなって思ってるの、周りがね。周りもそうだし、社会、人もそうだけど。…中略…でも自分にしてみればさ、おできをとるくらいのもんだっていう。

事例10は、GID当事者として生きていく決意をしていたハルが、当事者ではあっても「普通に」人生を歩んでいる現状を見て筆者がつぶやいた場面である。この発言は、一見するとGID当事者に対する差別的発言ともとられかねないが、筆者はこれまでのハルの人生行路に寄り添いインタビューを行ってきた立場として、「普通」ということばがハルにはそぐわないと感じていた。ハルの語った「孤独感、自己不安定感、深夜徘徊、自殺未遂」といった感情や行動は、「普通にいてる」と語れる人生では陥る確率は低いだろう。しかし、現時点のハルを目前にしたときに、「普通ではない」過去をもちつつも人生を激しく阻害されることもなく「普通にいてる」ように思えてしまうハルの語りが筆者の目には不思議に映ったのである。筆者の中に湧いたその感情は、ハルに対する距離化ともとれるだろう。筆者からの距離化に対し、ハルは自らの当事者性を否定、距離化し、「普通の24歳」であることを強調している。

事例11でも、筆者との間ですれ違いが生じている。ハルは自分が生きていく道として「単に人と摩擦が起きない」ことだけでなく、「自分が一番楽」になる道を模索していると語っている。

事例11

ハル：楽に生きる道と、もう一つあるとしたら、だから、楽っていうのがさ、単に人と摩擦が起きないとかそういうのじゃなくて、自分が一番楽。自分であることが楽っていうか、うん、その道を探しているのかな。

筆者：そうだねえ。すごい必死に、すごい必死に探してる感じするんだよね。やっぱりこういう人たち見てると。すごい大きい意味での自分探しじゃないけどさ、めっちゃ悩んで、すごいある時期勉強してさ、熱いんだよね、生き方的に。

ハル：でもさ、もったいないよね。それだけに全エネルギーが注がれて。別にそれだけ考えて気が済むなら考えてればって思うんだけど、なんかさ寂しいしさ、めんどくさいっていうかさ、嫌じゃんとか思う。勝手にやりたいことやって。「お前らもうちょっと考えることないの?」とか思ってさ。「それだけかい人生!」とか思ってさ。嫌だ!とか思って。嫌だわ。そんでさ、TS (GID当事者のなかでも、性別適合手術を望む当事者のこと) のひとはTSの人で固まってるってさ、なにそれとか?

ハルの発言に対して、筆者は同意を示してはいるが、GID当事者を「こういう人たち」という表現で括り、ハルを含めた彼らの「大きい意味での自分探し」をする生き方を「熱い」と賞賛している。しかし、ハルは筆者の発言した「大きい意味での自分探し」に対して否定的である。そして、ハルが生きようとする人生は決してGID当事者であることに熱を注ぐ人生ではなく、GID当事者同士間だけで付き合いをする狭い生き方を嫌悪している。ハルは、当事者として生きることが「普通の24歳であること」と矛盾しないことを筆者とのすれ違いをやりとりしつつ、繰り返し訴えることを通して、GID当事者ではない筆者と対等な関係性を構築しているように思われる。一方で、筆者はハルの性別移行に重大な意味を持たせようとすることで、絶えずハルとの間で距離化を行っているといえる。当事者であるハルと当事者ではない筆者との間での線引きをしていることが物語世界、ストーリー領域からも明らかである。

(1)～(4)における11の事例は、ハルの距離化行為と筆者の距離化行為が錯綜しあう事例といえる。これらについて分析を試みるということは、臨床心理学的に言えば、非面接者の語りを面接者と被面接者との間に生起する「転移－逆転移」の布置も含めて、その考察の俎上にのせ

ようとするものである。ゆえに、筆者の内的状態も分析の対象となる。ハルと筆者の関係は、事実上、ハルからのカミングアウトを受けた後につくられていった。ハルにはGID当事者としてのインタビューを引き受けてもらう一方で、友人としての関係も同時に形成されていった。当事者としてのハルと、常に当事者として生きているのではないハルの間の境界線は、筆者の中でも常に揺らぎ続けているものであった。そこにはGID当事者を理解したい気持ちと、純粋にハルについて理解したいという気持ちが存在していた。それらの気持ちがハルの距離化と齟齬を起こすとき、我々の対話には一種の亀裂が生じることになり、再度対話の建て直しが始まるのである。

5. 総合考察

本稿では、ある性同一性障害者の語りのトランスクリプトに異なる2つの質的方法を用い、知見の羅生門的生成を試みた。総合考察では、認識論的反省を通して得られた新たな知見（距離化行為）、及び羅生門的アプローチという方法論の2点について考察する。最後に、研究の限界と課題について述べる。

1. 羅生門的生成によって得られた知見－距離化行為について

ハルは、(1)他のGID当事者との間で、(2)自己と身体との間で、(3)過去の自分との間で、(4)今、自分がGID当事者として生きているということの4つについて距離化を行うことでいかなる自己を構築しているのだろうか。事例12をみてみよう。

事例12

筆者：あんまり、(行動や考え方が、私と) 変わらないよね、その辺私と。

ハル：そうそう、同じ同じ！その時に自分は、その(GIDの) せいかなって、いじいじいじいじしてみたりとか。まだ逃げて分かってるからいいじゃん、みたいな(笑)。

筆者：こっちに戻ってこれるわけね。

ハル：そうそう。

ハル：だから結局、あんまり友達いなかったのをそこのあれ(GID)のせいにしてるだけの話かもしれないけど。例えば、前仲良かった男の子が、もっと(他の)男の友達が普通にできたらポツといなくなるとかさ。…中略…ボンとそっちにいてしまうっていうことは、完全な男性扱いされてないから、男友達にはなれなかったのかなみたいな、そういう感じとかね。でもそれは逃げも半分はいつてから、いじけて。

筆者：じゃ、人間関係断ち切りたいていというのは、自分の中での逃げのときがあった？

ハル：あーそうだね。人間関係めんどくさ、とかうざったいとか。あとなんだろう、…中略…変にいじけたりした時とか(笑)。

事例12は、ハルが現状に対して否定的な見方に陥ったときに、うまくいかない物事の理由をGIDのせいにしてしまう自分を「逃げている自分」と意味づけている場面である。そして、「逃げ」ていることを自覚しているから「こっちに戻ってこれる」(筆者の発言)という。この語りからは、ハルが一時的に逃げても戻ってくる「こっち」という心理的場所を構築し、自己の拠り所に行っていることが分かる。「こっち」は、(1)～(4)で距離化を行った線上に浮かび上がるもの

であって、そもそも初めからそこに心理的場所として確保されていたわけではない。GID当事者として生きてきた歴史的時間のなかでそれは構築され、今もストーリー領域において構築され続けているのである。

これらの4つの距離化によって、ハルは当初自分に降りかかってきた災難とも思えるGIDを自己から外在化し、コントロール可能なものとし、主体的に引き受けていくことを可能にしているように思われる。GIDを乗り物に例えたとするならば、幼少期から乗せられていた得体の知れない暴走車（GID）を認知してから、自身を暴走車の運転手とし、その方向性や乗りこなす方などを身体でもって会得してきたのであろう。自分が気づかぬうちから車が走り続けてきた過去や今後も乗り続けていかなければならない未来をみつめ、GIDであることにこだわることなく過去－現在－未来という時間の流れの中で、「こっち」という心理的場所が構築されている。ゆえに、ハルの「こっち」は、語りの諸所の場面で揺らぎをみせていることも事実である。（1）他のGID当事者との間での距離化においても、他のGID当事者と同様に、ふと自分の「見かけ」を気にする語りが挿入されたり、（3）過去の自分との間においても、現在でも否定的な自己についての語りがみられたり、ある時には他者の前でまだ変化のない女性の体型が目立たないように背を曲げてしまうハルもいる。このような揺らぎの語りは、一見すると気のつかない間に会話の中に埋もれていきがちだが見過ごすことはできないだろう。また、GIDという病いに理解のない他者との間では「こっち」のハルが通用しない場面にも直面している。筆者とのやりとりにおいてさえも、そのような会話の抗争が継続している局面が数箇所あった。そのような場合、ハルは「もうどうでもいいじゃん」「めんどくさい」といって笑って流すパターンが見受けられたが、これも「こっち」にいるハルを揺らがす対話であるといえる。当事者－非当事者間の対話による距離化がバランスを失い、自己の構築を先延ばしにしていると思われた。

やまだ（1987）は、子どもの発達における「未分化から分化へ」という発達図式に対し、「はなれる」という概念を提唱し、従来の発達観－最初に構成要素がある（個がある）、それらの構成要素は、はじめは未分化である、それらがだんだん分化すること（距離の増大）が発達である－を問い直している。本稿における自己構築プロセスの中核である「距離化」という行為志向性についても、発達理論的に捉え直される余地があるのではないだろうか。やまだ（1987）は、乳児の発達における大きな変化として「静観的認識のはじまり」をあげる。そして、静観的認識のはじまりにおいては、〔ここ〕にしながら、〔ここ〕から離れたところを見ることができるようになるという意味での「はなれる」はたらしが必要だという。静観的認識によって、〔ここ〕にしながら、離れた遠くの世界を視野に入れ、世界を広げることができるようになる。ハルの距離化行為もやまだの「はなれる」という概念に沿って考えるならば、ハルは距離化を行うことで〔ここ〕にしながらにして様々な自己構築を行っているといえる。距離化によって構築された「こっち」という心理的場所は、ハルにとっても明確に語られるものでなく漠然としており、個体内や個体間のコミュニケーションによって瞬間瞬間に構築され、また修正される時空間である。強力な意志を伴った自己の構築であったり、どこか確固とした実体ある場所へと一直線に向かって伸びていくような実線ではなく、いわば消極的な自己構築であり、常に揺らぎを伴うものである。しかし、やまだ（1987）によれば、静観的認識によって、空間・時間・心理的にも対象と距離をおいて対せるようになるという。本稿で見出されたような確立した個を前提にしない、いわば消極

的自己観は、従来の自己の発達やアイデンティティ論に見直しを図るものになるだろう。「はなれる」という概念がプラスとマイナスの発達を含み両行する人間像を仮定すると同様に、「距離化」という概念にも語る主体（自己）の曖昧性と実体性の両方を包含する人間像が見出されるのである。

2. 羅生門的アプローチという方法について

本稿では、湧井（2006a）の語りデータの分析について認識論的反省を行い、異なる方法論から同一語りデータの再分析を行った。物語世界だけではなくストーリー領域をも分析対象とし、インタビューという対話的相互状況において語り手が経験の意味を構築する「いま、ここ」での自己構築プロセスをも研究の射程に入れることが可能となった。その結果、物語世界のみの分析では看過されていたハルの揺らぎやハルと筆者との関係性、さらに筆者側の分析にまで分析範囲が拡大した。それは、湧井（2006a）で依拠した自己物語論と本稿で依拠した言説分析における自己の捉え方が大きく異なるためである。認識の異なる方法論を組み合わせで知見を生成していく羅生門的アプローチならではの取組みである。羅生門的アプローチを分析に用いた研究で主張されるのは、事実や出来事の多面的構造や、事実につながるそれぞれの語りのせめぎあいや一つの見方への収束といった動的側面である。しかし、方法論として羅生門的アプローチを用いる場合には、データの多面的構造であるとか、知見のせめぎあいから一つの知見への収束というように道を辿る必要性は必ずしもないのではないだろうか。むしろ、異なる方法論によって照射されたデータから、双方にせめぎあう知見が得られたならば、そのせめぎあいがなぜ、いかに生じたのかをみていかなければならないだろう。「ずれ」という言葉が内包する意味合いを十分に読み取り、「ずれ」の内奥に迫っていくことで、一見すると「ずれ」ているもののなかに共通性がみられるかもしれない。湧井（2006a）と本稿で得られた知見の「ずれ」を考えると、筆者に向かって確固とした自己物語を語るハルが、様々に距離化を行い「いま、ここで」自己を消極的に構築しつつ、ときに揺らぎ、自己構築の破綻を迎えることもあるというパラドキシカルな知見が得られている。語る自己は、筆者の目の前で破綻はしても、語る自己の自己物語が破綻することはない。この「ずれ」が示唆するように、語る自己や自己のあり方にはパラドキシカル性が秘められているのではないだろうか。二つの知見を統合することよりも、双方の知見の豊かさをそのままにして両行させていくことが柔軟な自己論を生み出していくだろう。

3. 研究の限界と課題

最後に、本稿で試みた羅生門的アプローチの限界について述べる。本稿では同一データに異なる認識論、方法論を用いて再分析を行ったが、分析者はいずれも筆者であった。研究の信頼性や解釈の妥当性という点からみれば、本稿においても信頼性、妥当性ともに低いといわざるを得ない。たとえば、方法論を変えてデータを見直しても、分析者の意図や主観を免れることは不可能だからだ。今後、信頼性や妥当性の高い研究を維持するためには、分析者の視点をも羅生門的にしていくことが課題となる。しかし、インタビュアーのプライバシーの関係から単に分析者を増やすというのは困難である。また、分析者を増やしたところでそれが本当に羅生門的なのかどうかも結局のところ疑わしい。現時点で考えられる方策として、分析者が時間をかけて何度も同一デー

タに向かい合い、そのつどに解釈を行うというやり方が考えられる。つまり、分析の時間を羅生門的にしていくのである。時間を経て行われた解釈にどのようなずれが生じているのか知ること、解釈の厚みが増していく。他にも、研究のスーパーバイザーをつけるなどして分析者自身の中に他者の視点を取り込むことも有効であろう。それは、分析者自身が自己の視点から「はなれる」「距離化する」ことに他ならない。

いずれにせよ、どの方法論でも同様であるが、羅生門的アプローチを用いる理由を明確にすることが肝要である。今後は、羅生門的アプローチを理論的、実践的に体系立て、実際の研究や現場に生かしたい。

文献

- Bamberg, M. (2004). Narrative discourse and identities. In J.C. Meister, T. Kindt, W. Schernus, & M. Stein (Eds). *Narratology beyond Literary criticism*. p.213-p.237. New York: Walter de Gruyter.
- Cameron, D. (1985). *Feminism and Linguistic Theory*. Hampshire: Macmillan. 中村桃子(訳).
- (1996). フェミニズムと言語理論. 勁草書房.
- Gergen, K.J.(1994). *Self-Narration in Social Life. Realities and Relationships*, p.185-p.209. Cambridge, Ma: Harvard University press.
- 川喜田二郎. (1967). 発想法—創造性開発のために. 中央公論社.
- Lewis, O. (1969). サンチェスの子供たち(柴田稔彦・行方昭夫, 訳). みすず書房
- 松本啓子. (1999). ナラティブアプローチの可能性と限界をめぐって—「異文化」理解の詩学と政治学—. 言語文化. 1(4). p.759-p.p.780.
- Nightingale, D. and Cromby, J. (1999). *Social Constructionist Psychology: A Critical Analysis of Theory and Practice*. Buckingham: Open University Press.
- Peacock, J. & D. Holland. (1993). The Narrated Self: Life Stories in Process. *Ethos*. 21(4). p.367-p.383.
- Potter, J. & Wetherell, M. (1987). *Discourse and Social Psychology; Beyond Attitudes and Behaviour*. London: Sage.
- 桜井 厚. (2002). インタビューの社会学. せりか書房.
- 佐藤郁哉. (2002). フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる. 新曜社.
- 湧井幸子. (2006a). トランスジェンダーを生きる当事者と家族—人生イベントの羅生門的語り— 2005年度修士論文, 未刊行
- 湧井幸子. (2006b). 「望む性」を生きる自己の語られ方—ある性同一性障害者の場合—. 質的心理学研究, 6. p.27-p.47.
- Willig, C. (2001). *Introducing Qualitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Method*. Buckingham: Open University Press.
- やまだようこ. (1987). ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち 1. 新曜社.
- 山内俊雄・東 博彦・五十嵐 節・池田 斉・石井 純・磯田和雄・片山 勲・木下清一郎・村松正資. (1996). 「性転換手術の臨床的研究」に関する審議経過と答申, 埼玉医科大学倫理委員会, 埼玉医科大学雑誌. 23(4). p.313-p.329.

(日本学術振興会特別研究員 教育方法学講座 博士後期課程1回生)

(受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日)

An Analysis of Self Construction of One Person with Gender Identity Disorder: Generating Rashomon-like Knowledge Based On Same Transcripts

SHOJIMA(WAKUI) Sachiko

This article explores a Rashomon-like approach for generating two new kinds of knowledge using same transcript, which was obtained from several interviews with a person with gender identity disorder(GID). In the analysis of a transcript, two qualitative methods were employed: self-narrative perspective and discursive psychological perspective. There are two phases of narrative concept: "narrative world" and "story region". In this article, these two phases of narrative were analyzed. Wakui (2006b) focused only on "narrative world" in narrative using self-narrative perspective, and interpret a meaning of experiences of a person with GID in the "then and there". This article focusing not only "narrative world" but also "story region" using discursive psychological perspective, showing the processes of person's self construction in the "now and here", which is a dialogical and reciprocal context.